

昆虫図鑑で見る “日本の昆虫の文明開化”

神吉 正雄¹⁾

1. はじめに

昨年（2023 年）、NHK の朝ドラで、牧野富太郎の生涯を題材とした「らんまん」が放映され話題となった。牧野富太郎が日本全国を歩き、多くの新種を含む日本の植物に学名を与え、1940 年（S15 年）に「牧野日本植物図鑑」を出版し、世界に日本の植物を紹介した功績は極めて大であった。

日本は身近に多彩な自然があり、子どもたちがネットを持って虫採りをする姿は日常風景である。また古くから花鳥風月や鳴く虫などを愛でる文学や美術品も多く見られる。しかもそれぞれの草木や鳥、鳴く虫や蝶に名前を付け、親しんできたのである。ところが、それぞれの国で付けられている名前が、国際的には通じないのである。そこで分類学の父と呼ばれるカール・フォン・リンネ（Carl von Linne）が 1735 年に「自然の体系」を著し、その中で学名は属と種名をラテン語で表す二名法を体系づけ、さらに 1758 年に同誌の 10 版で「国際動物命名規約」「国際植物命名規約」などを提案した。この規約に基づいて学名を付けることにより、その種名は国際的に認められるようになったのである。牧野富太郎もこの規約に従って日本の植物に名前を付けていったので、世界に通じる名づけ親となった訳である。この学名を付けるようになった時期が、日本の昆虫が文明開化した時期と見ていいのではないだろうか。

昆虫の場合は、いつ頃から日本の昆虫に学名が付けられたのか、またその名付け親は外国人か、日本人かを調べてみた。次に、日本の昆虫に正式学名を使って分類された図鑑は何時頃から出版されたのかを調べて見た。オサムシに関する文明開化は既に報告したが（神吉, 2023）、ここでは一般に親しまれているチョウの場合を紹介する。なお、筆者はチョウの専門家でなく、専門の生物（昆虫）地理学の視点で飛ぶことができないオサムシや分布地域を拡大する移入昆虫などを主な研究テーマにしてきた。ここで取り上げるチョウについては、中学生時代に横山光男の「原色日本蝶類図鑑」を見てワクワクし、以来 70 年間虫好きを通してきた一昆虫愛好家である。チョウに触れあった 70 年間のアマチュアの日で

書いたものであることを、了解していただきたい。なお、ここで登場させた図鑑類の多くは、筆者が大学時代から地理学の古書、古地図と昆虫関係の古書や図鑑を収集していたものを使用し、一部宝塚市立中央図書館・西宮市立中央図書館、西宮市立大社小学校、宝塚市立手塚治虫記念館の協力を得た。お礼を申し上げる。

2. 日本のチョウの学名記載時期について（表 1）

日本のチョウに学名を付けての最初の記載は、今から 266 年前の 1758 年（宝暦 8 年）でリンネによるものであった。この年にリンネが記載したチョウは、アオスジアゲハやモンシロチョウ、ルリシジミ、キタテハなどのよく見かけるチョウから、オオイチモンジやクジャクチョウなどの高山チョウ、リュウキュウムラサキやツマベニチョウなどの南方系のチョウなどの 39 種であった。リンネは 1758 年に学名の記載法を提案し、それまでに確認していた日本のチョウに学名を付けたのである。ここで注目したいのは、この年が江戸時代の真っ只中であることで、ヨーロッパの学者と日本の昆虫学との差が大きかったことである。その後も、外国人による新種記載が続き、杉田玄白が解体新書を書いた 1774 年迄に 61 種の記載がされ、伊能忠敬が「日本沿海輿地全図」の測量を始めた 1800 年（寛政 13 年）までに日本のチョウの 4 割近い 103 種が記載されている。外国人による記載はその後続き、明治時代に入った 1892 年（M 28 年）迄に 147 種の記載が追加され合計 250 種で、日本のチョウの 9 割を超す種が外国人により記載されたことになる。1886 年（明治 19 年）にはイギリス人のヘンリー・プライヤーが日本へ来て採集活動をし、「日本蝶類図譜」を日本で出版している。

明治時代に入ると日本人の昆虫の調査や研究も進み始め、1883 年（M 16 年）には日本最初の昆虫採集案内書である「採虫指南」が出された。1904 年（M 37 年）には松村松年が「日本千虫図解」を出版し、1906 年（M 39 年）に日本人初の新種キマダラルリツバメ、リュウキュウウラナミジャノメ、オガサワラセセリの 3

¹⁾ Masao KAMIYOSHI 兵庫県宝塚市

表 1. 日本産蝶類の新種記載年一覧表.
 *記載年は日本産蝶類標準図鑑 (2006 年発行) による

記載年	元号	日本のチョウ新種記載年種 (<>: 日本人記載種, 他は外国人記載種)	主な図鑑の発行, 記事
1758	(江戸時代)	ナガサキアゲハ, モンキアゲハ, シロオビアゲハ, キアゲハ, ミカドアゲハ, ツマキチョウ, クマモツマキチョウ, モンシロチョウ, オオモンシロチョウ, エゾシロチョウ, ツマベニチョウ, ウラナミシロチョウ, リンゴシジミ, ルリシジミ, ヒメシジミ, リュウキュウアサギマダラ, カバマダラ, ミドリヒョウモン, ギンボシヒョウモン, オオイチモンジ, シロミスジ, アカマダラ, キタテハ, シータテハ, ケベリタテハ, クジャクチョウ, コヒオドシ, ヒメアカタテハ, タテハモドキ, アオタテハモドキ, リュウキュウムラサキ, アカボシゴマダラ, ウスイロコノマチョウ, クモマベニヒカゲ, ヒメチャバネセセリ, 迷蝶: オオカバマダラ	リンネ: 「国際動物命名規約」提案
1760-64		(61) ミヤマモンキチョウ, ベニシジミ, シロオビヒメヒカゲ, (63) ツマクロヒョウモン, カバタテハ, フタスジチョウ, ルリタテハ, ジャノメチョウ, ウラジャノメ, (64) イチモンジチョウ, イワサキタテハモドキ, メスアカムラサキ	
1765-69		(67) アゲハ, (68) タイワンモンシロチョウ, (73) ウラベニヒョウモン, タイワンキマダラ	
1770-74		(71) イワカワシジミ, ツバメシジミ, ジョウザンシジミ, ウラギンシジミヒョウモン, コミスジ, タカネキマダラセセリ, (73) ウラベニヒョウモン, タイワンキマダラ	(74) 杉田玄白 「解体新書」
1775-79		(75) クロアゲハ, ベニモンアゲハ, ウスキシロチョウ, ホリイコシジミ, ウスコモアサギマダラ, コヒョウモン, ウラギンヒョウモン, シロオビヒカゲ, ダイセツタカネヒカゲ, タイワンアオバセセリ, ネットタイアカセセリ, (77) タイワンシロチョウ, ナミエシロチョウ, イワサキノハ, (78) ヤエヤマカラスアゲハ, ツマベニ, (79) ゴマシジミ, ミヤマシジミ, スジグロカバマダラ, ツマムラサキマダラ	(75) 長久保赤水 「日本輿地路程全図」
1780-84		(80) ヒョウモンチョウ, コジャノメ, クロコノマチョウ, オキナフビロウドセセリ, (81) カラフトルリシジミ, ヒオドシチョウ, エルタテハ, (82) カラスシジミ, ルリシジミ, ヒメアサギマダラ	
1785-89		(85) チョウセンシロチョウ, (87) シルビアシジミ, ヒメヒカゲ	
1790-94		(91) アサヒヒョウモン, タカネヒカゲ, (93) クロモンシロチョウ, (94) アカタテハ	
1795-99		(98) クロボシセセリ, チャバネセセリ	
1800-04		(03) ホソバヒョウモン	(00) 伊能忠敬 「日本沿海輿地全図」の測量開始
1805-09		(05) モンキチョウ, (08) カラフトセセリ, (09) ベニヒカゲ	
1815-19		(19) マルバネルリマダラ	
1820-24		(24) タイワンツバメシジミ	
1825-29		(28) ヤクシマルリシジミ, タイワンクロボシシジミ, カラフトタカネキマダラセセリ, (29) クロマダラソテツシジミ, コムラサキ	(26) ベリー来航, シーボルト江戸へ
1830-34		(34) オオゴマダラ	
1835-39		(36) ジャコウアゲハ, ツマグロキチョウ, タイワンキチョウ, カワカミシロチョウ	
1840-45		(40) イシガケチョウ, コノハチョウ, スミナガシ, (43) クロツバメシジミ, フタオチョウ, アオバセセリ, (44) ヤマトシジミ, アサギマダラ, ヤエヤマイチモンジ, タイワンヒメシジミ, アサマシジミの亜種イシダシジミ	
1845-49		(47) メスグロヒョウモン	
1850-54		(50) ウスバキチョウ, (51) シロモンクロシジミ, キリシマミドリシジミ, アサマシジミ, ツマジロウラジャノメ, (52) クロンジミ, オオミスジ, チャマダラセセリ, ギンイチモンジセセリ, コキマダラセセリ, ホソオチョウ, (53) イチモンジセセリ, コムラサキ褐色型: クロコムラサキ, キマダラモドキ	
1855-59		(57) スジグロチョウ, サトキマダラヒカゲ, ダイミョウセセリ, (58) ミヤマカラスアゲハ, ヒメシロチョウ, スジボソヤマキチョウ, ルーミスジミ, アマミウラナミシジミ, テングチョウ, ミスジチョウ, ウスイロヒョウモンモドキ, オオヒカゲ, ヒメジャノメ, テツイロビロウドセセリ, (59) コヒョウモンモドキ, ホシチャバネセセリ, (63) オオムラサキ	
1860-64		(60) ヒメウラナミシジミ, マルバネウラナミシジミ, シロウラナミシジミ, ウスアオオナガシジミ, クロヒカゲモドキ, (61) ミヤマシロチョウ, ミズイロオナガシジミ, メスアカミドリシジミ, サカハチチョウ, ミヤマセセリ, ヒメキマダラセセリ, ヘリグロチャバネセセリ, (62) ムラサキツバメ, トラフシジミ, クモガタヒョウモン, オオウラギンヒョウモン, ゴマダラチョウ, ヒカゲチョウ, ホソバセセリ, クロセセリ, (64) カラスアゲハ	
1865-69	(68)M1	(65) アカシジミ, ウラナミアカシジミ, (66) ウスバシロチョウ, ツマキチョウ, カバイロシジミ, オオウラギンシジミヒョウモン, クロヒカゲ, ヒメウラナミジャノメ, ユウレイセセリ, トガリチャバネセセリ, シロオビマダラ, (67) ハマヤマトシジミ, (68) リュウキュウヒメジャノメ, (69) キタキチョウ, ヤエヤマムラサキ	(67) 大政奉還
1870-74	M3-7	(71) ホシミスジ, (72) ヒメギフチョウ, (73) ウラゴマダラシジミ, (74) ミドリシジミ, コウトウシロシタセセリ, 迷蝶: コモンアサギマダラ	(72) 松村松年出生
1875-79	M8-12	(75) ゴイシシジミ, コチャバネセセリ, キマダラセセリ, オオチャバネセセリ, オオミドリシジミ, ムラサキシジミ, (77) オナガアゲハ, ヒメキマダラヒカゲ, (78) ヒョウモンモドキ, アカセセリ, スジグロチャバネセセリ, ヒメイチモンジセセリ, ミヤマチャバネセセリ, (79) メスシロキチョウ, サツマシジミ, キバネセセリ	
1880-84	M13-17	(80) チョウセンアカシジミ, (81) ウラキンシジミ, ジョウザンシジミ, ヤマキマダラヒカゲ, (82) エゾヒメシロチョウ, エツスジグロチョウ, ウスイロオナガシジミ, ウラミスジシジミ, ウラクロシジミ, (83) オガサワラシジミ, タイワンアサギマダラ, ウラナミジャノメ	(83) 「採虫指南」曲直頼愛 *1
1885-89	M18-22	(87) アイノミドリシジミ, ハヤシミドリシジミ, ウラジロミドリシジミ, オオゴマシジミ, オオルリシジミ, ムモンアカシジミ, (89) ギフチョウ, ツシマウラボシシジミ, ゴイシシジミ, ゴイシツバメシジミ	(86) 「日本蝶類圖譜」ヘンリー・J・S・ブライヤー *2
1890-99	M23-32	(92) ハヤシミドリシジミ, ヒロオビミドリシジミ	
1900-09	M33-42	(06) <キマダラルリツバメ, リュウキュウウラナミジャノメ, オガサワラセセリ (松村)>, (09) ヤマトスジグロシロチョウ, アサマイチモンジ	
1910-14	M43-T3	(10) <フジミドリシジミ (松村)>, (12) ヒメウスバシロチョウ	
1915-19	T4-8	(15) <エゾミドリシジミ (松村)>, (19) <スギタニルリシジミ (松村)>, リュウキュウウラボシシジミ	
1920-24	T9-13	(20) ヤエヤマウラナミジャノメ, (24) キリシマミドリシジミ屋久島亜種<ヤクシマミドリシジミ (YAZAKI)>	(2) 「昆虫記」ファーブル著 大杉栄訳
1925-29	T14-S4	(29) アサマシジミの亜種<ヤリガタケシジミ・インダシジミ (松村)>	(29) 「日本通俗昆虫図説蝶之部」松村松年
1930-34	S5-S9		(31) 「日本通俗昆虫図説 (甲虫之部)」松村松年
1935-39	S10-14	(35) <ヒサマツミドリシジミ (NAGAI・ISHIGA)>	(39) 「原色蝶類圖譜」平山修次郎
1940-44	S15-19	(41) パナナセセリ	(40) 「原色甲虫圖譜」平山修次郎・「牧野日本植物図鑑」牧野富太郎, (41) 「原色千種昆虫圖譜」平山修次郎
1945-49	S20-24	(47) <クロミドリシジミ (白水)>, <マサキウラナミジャノメ (ITO)>	
1950-54	S25-29	(53) <カシワアカシジミ (松村)>	(50) 「日本昆虫圖鑑」改訂版初版, 江崎悌三他, (54) 「原色日本蝶類図鑑」横山光男著,
1955-59	S30-34	(57) <ベニモンカラスシジミ (OTA・KUSUNOKI)>	(57) 牧野富太郎没
1960-64	S35-39	(64) <アサヒナキマダラセセリ (白水)>	(60) 松村松年没
1985-89	S60-H1		(85) 「原色昆虫大図鑑」白水隆著
1990	H2		(90) 「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男著

表 1. 続き

1998	H10		「手塚治の昆虫博覧会」手塚治
2006	H18		「日本産蝶類標準図鑑」白水隆著
2012	H24		「フィールドガイド 日本のチョウ」日本チョウ類保全協会

注記: *1:「採虫指南」曲直瀬愛, 日本最初の昆虫採集案内書
*2:「日本蝶類図譜」ヘンリー・J・S・プライヤー著, 1982 年(昭和 52 年)に江崎悌三解説, 白水隆学名校正表が付記されて再復刻されている。

種を記載した。その後, 松村は 1910 年 (M43) にフジミドリシジミ, 1915 年 (T4) にエゾミドリシジミ, 1919 年 (T8) にスギタニルシジミの新種を次々発表した。

1920 年 (T9) 以降には白水隆など日本人により 1935 年 (S10) ヒサマツミドリシジミ, 1947 年 (S22) クロミドリシジミ, マサキウラナミジャノメ, 1953 年 (S25) カシワアカシジミ, 1957 年 (S32) ベニモンカラシジミ, 1964 年 (S39) アサヒナキマダラセセリが新種記載された。1924 年 (T13) ヤクシマミドリシジミが発表されたが, 現在はキシマミドリシジミの屋久島亜種とされている。以上 12 種が日本人が記載し, 現在でも種として認められているのである。

3. 日本のチョウの図鑑の変遷について

日本のチョウが図鑑の中でどのように紹介されてきたかを見ていきたい。日本で初めて学名を付したチョウ類図鑑は, イギリス人のヘンリー・ジェイムス・ストヴィン・プライヤー (Henry James Stovin Pryer 1850-1888) である。彼が日本へ 1871 年 (M 4 年) に来日して昆虫の調査をし, 1886 年 (M 19 年) に日本最初の蝶類図鑑である原色の「日本蝶類図譜」(原色図, 137 種採録, 学名記述, 和名なし, 日本で出版)を刊行している。

日本人が最初に本格的な蝶類図鑑を出版したのは, 昭和に入り 1929 年 (S 4 年) 松村松年の「日本通俗昆虫図説 蝶之部」である。1940 年 (S 15 年) には平山修次郎による「原色蝶類図譜」が出版され, 漫画家の手塚治虫等昆虫愛好家に愛読された。戦後, 1950 年 (S 25 年) 石井悌・江崎悌三による全昆虫分野を対象とした北隆館の「日本昆虫図鑑」が出版された。蝶類図鑑としては横山光男の「原色日本蝶類図鑑」が 1954 年 (S 29 年) に出版され子どもや一般のチョウ愛好家にも活用された。

その後, 現在に至るまで多くの本格的な蝶類の図鑑やハンドブックタイプの普及本が出されてきた。分類学の進展もあり 1990 年 (平成 2 年) に猪又敏男の「原色蝶類検索図鑑」が出版され, その後上位分類の基準の見直しもあり, 学術的レベルが高い本格的な蝶類図鑑として白水隆の「日本産蝶類標準図鑑」が 2006 年に出版

された。一方で, 子どもや一般昆虫愛好家向きの日本チョウ類保全協会の「フィールドガイド日本のチョウ」も出版された。

ここでは, 松村松年の「日本通俗昆虫図説 蝶之部」, 平山修次郎の「原色蝶類図譜」, 江崎悌三・白水隆他の「日本昆虫図鑑」, 横山光男の「原色日本蝶類図鑑」, 白水隆の「原色昆虫大図鑑」, 猪又敏男の「原色蝶類検索図鑑」, 白水隆の「日本産蝶類標準図鑑」, 日本チョウ類保全協会の「フィールドガイド 日本のチョウ」を取り上げて, 日本のチョウの図鑑で見られる掲載内容の変化を以下で述べる。

- ①「日本通俗昆虫図説 蝶之部」松村松年著 春陽堂 (東京)
＜1929(S4) 年 10 月発行. B 5 版 原色図鑑. 図版 32P, 種の説明: 和文 45 p, 英文 66 p. 掲載種 166 種 (全種の 75% 図示・説明). (日本列島・琉球含 + 樺太 + 朝鮮, 南洋 + 台湾産) 日本産蝶類分布表 37 p＞

著者の松村松年 (まつむらしょうねん, 1872-1960) は, 札幌農学校 (現北海道大学) から北海道大学で学び, 北海道大学教授・農学博士として, 日本の近代昆虫学を築いた人物である。1898 年 (M 31 年)「日本昆虫学」, 1904 年 (M 37 年)「日本千虫図解」を著し, 1926 年 (T 15 年) には研究成果が世界に通じるために英文の昆虫雑誌「Insecta Matsumurana」を創刊している。一方で, 多くの新種・新亜種などの記載をしている。

「日本通俗昆虫図説 第 1 巻蝶之部」は, 第 2 巻蛾之部, 第 3 巻甲虫之部, 第 4 巻蜂蠅之部, 第 5 巻蜻蛉蝗其他で構成されている内の一冊である。掲載されているチョウは, 当時日本領土となっていた日本列島に加えて樺太, 朝鮮, 台湾に南洋領土が対象となっている。掲載されているチョウは総数 166 種であり, 日本産蝶 220 種の 7

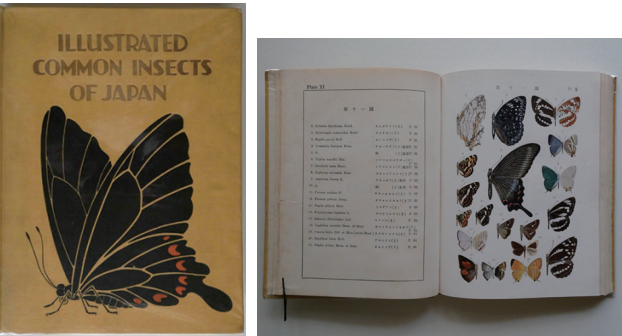


図 1. 「日本通俗昆虫図説 蝶之部」松村松年著 昭和 4(1929) 年発行。

割 5 分のチョウを図示し解説をしている。図版は写真でなく原色の手書図である。図示した蝶の解説は日本語と英文とで記述し、外国へも日本のチョウの紹介となっている。本書の“終わり”に、当時の日本領土に産する 510 種全てのチョウの目録と分布表（樺太、北海道、本州、四国、九州、琉球、朝鮮、台湾、南洋諸島別）を掲示している。なお、各チョウの記載は、種以外に亜種・型も記し、命名者・その記載年次も書かれている。

この図鑑で松村が新種・新亜種・新型を命名した種数は、日本列島では 18 新種、28 新亜種、57 新型、樺太では 2 新種、16 新亜種、19 新型、朝鮮では 7 新種、11 新亜種、27 新型、台湾では 35 新型、32 新亜種、39 新型、南洋諸島では 5 新亜種と、非常に多くの記載をしている。ただし、その後の研究で、既に外国の研究家が新種記載をしており、命名者名とその年次が修正されたものも多い。

以上のように、日本の昆虫学を先導し、日本産のチョウの多くの新種の発見を含む確認をし、学名、和名を定め、本格的な日本の昆虫図鑑の出版をした功績は大きい。チョウを語る場合は松村松年の名前と「日本通俗昆虫図説 蝶之部」は記憶しておくべきであろう。

②「原色蝶類図譜」平山修次郎著 三省堂（東京）

< 1939(S14) 年 6 月発行。B 6 版 原色図鑑(写真)。図版 60 p, 種の解説 122 p, 本文掲載種を含む掲載種 433 種, 写真 651 枚(日本列島・琉球含+樺太+朝鮮, 南洋+台湾産) >

平山修次郎は大正から昭和にかけての昆虫学者で、東京都の井之頭公園に平山博物館を造り日本の昆虫だけでなく世界の珍しい蝶を集めていた。本図鑑の序に“こ

れらの所蔵標本中から新鮮な標本を用い、優秀な原色写真で天然色を出した”と記しており、「日本通俗昆虫図説 蝶之部」では使えなかったカラー写真の蝶類図鑑を著した。また、“それまでは昆虫愛好家が見る図鑑は種類数が少なかったため、名前を調べるのに不便であったため 433 種の標本を掲示した”とある。

本「原色蝶類図譜」は平山修次郎の「原色千種昆虫図譜」「原色甲虫図譜」との三部作の一つである。平山修次郎は松村松年の教示も受けており、「日本通俗昆虫図説 蝶之部」の構成に類似するところが多い。末尾の日本産蝶類分布表に掲載されているチョウは、当時日本の領土となっていた日本列島と琉球以外に樺太、朝鮮、南洋、台湾が掲載されており、樺太 62 種、北海道 115 種、本州 158 種、四国 109 種、九州 124 種、朝鮮 223 種、琉球 90 種、台湾 40 種、南洋 35 種の種類のチョウが分布していることを記している。

この図鑑段階で日本人が新種記載したチョウはウスバキチョウやクモマツマキチョウなどの 24 種で、そのうち松村松年記載種は 21 種である。「日本通俗昆虫図説 蝶之部」の 18 種より 6 種が増えている。

この図鑑は A5 版で手軽で、しかも高価格でなかったこともあり、一般の昆虫愛好家に“平山の昆虫図鑑”として広く活用された図鑑である。この図鑑を愛用した一人に漫画家の手塚治虫がいた。手塚少年は小学校 5 年生の時に平山の昆虫図鑑を友人から見せられ昆虫採集をするようになり、自宅の宝塚御殿山周辺や箕面公園などへ出かけた。一方で中学生時代には、この図鑑を見て正確な模写を多く書いていた。写真は手塚治虫記念館の許可で撮影させてもらったチョウのスケッチと本図鑑の同じチョウを比較したものである(図 3)。手塚少年の模写力には驚かせられる。

③「日本昆虫図鑑」改訂版 江崎悌三・白水隆他著 北隆館（東京）

< 1950 (S25) 年 11 月発行。A 5 版 モノクロ図鑑。全 1738 p, 蝶の部 60 p, 図版・解説 182 種。昆虫綱概説 13 p. >

本図鑑は、戦後に出された日本の全昆虫分野を掲載した最初の本格的な図鑑である。そのため B5 版サイズであるが 1738 頁という分厚い図鑑となっている。図版



図 2. 「原色蝶類図譜」平山修次郎著 昭和 14(1939) 年発行.



図 3. 平山修次郎の「原色蝶類図譜」(左), 手塚治虫少年の中学校時代の模写図(右).

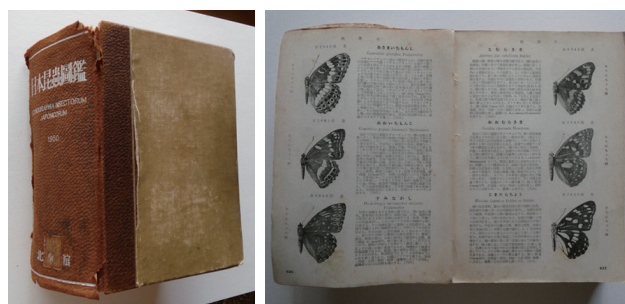


図 4. 「日本昆虫図鑑」江崎悌三・白水隆他著 昭和 25(1950) 年初版発行.

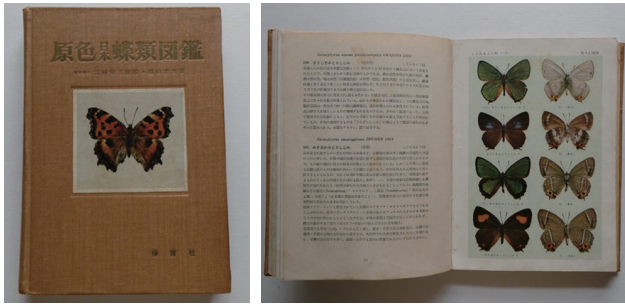


図5.「原色日本蝶類図鑑」横山光男著, 江崎悌三校閲 昭和29(1954)年発行.

は扉の所で11種の原色図版が掲載されているが、本文の図版はモノクロであるため、これまでの昆虫図鑑が原色図版であるだけに、特にチョウに関しては利用するのにっては物足りなさがある。しかし、全昆虫を調べることができる図鑑としては貴重で、公共図書館や学校には必ず配架されていた。添付の写真の本図鑑は、西宮の小学校で50年ほど子どもたちに活用され、手垢にまみれ、ぼろぼろに痛み廃棄になったものを譲り受けたものである。虫好きの子どもたちの夢を育んだ貴重な1冊と言えよう。

本図鑑のチョウの項には、182種が掲載され、当時の日本領土に産するチョウをほぼ網羅している。また、末尾に、昆虫綱概説として昆虫の形態、分類、日本の昆虫類についての解説を執筆者の江崎悌三が書いている。

④「原色日本蝶類図鑑」横山光男著, 江崎悌三校閲 保育社 (大阪)

< 1954(S29)年6月発行. A5版 原色図鑑. 全193p, 図版63p, 種の解説74p. 掲載種199種(日本列島). 末尾に蝶生態一覧表50p >

戦後少し落ち着きを見せてきて、子どもたちを含み昆虫採集や研究の機運が高まってきた。その中で、本格的な原色の蝶類図鑑が出版された。特に、「日本昆虫図鑑」が高価であることもあり、チョウ愛好家にとっては待ち遠しかった図鑑である。当時中学生の筆者は兄と大阪周辺の昆虫採集地へ出かけ、帰宅後にはこの図鑑でチョウの確認をすることが一番の楽しみであった。

本図鑑では日本人が命名記載した種は34種、そのうち松村松年の記載は27種、白水隆の記載が3種である。シーボルトが命名記載した種がナガサキアゲハ(1826年)、ルリタテハ(1824年)の2種が見られるのは興味深い。ただ現在は、ナガサキアゲハはリンネの1758年記載、ルリタテハもリンネの1763年記載に修正されている。

なお、本図鑑が出版された後に保育社から、川副昭人・若林守男著で「原色蝶類図鑑」の大幅な改訂版が1976年(S51)に出版されている。この改訂版の作成に当たり多くの海外の文献と大英博物館のタイプ標本等を検している(本書、序より)。また、分類に必要な各種の交



図6.「原色昆虫大図鑑」蝶の項 白水隆著 昭和60(1985)年発行.

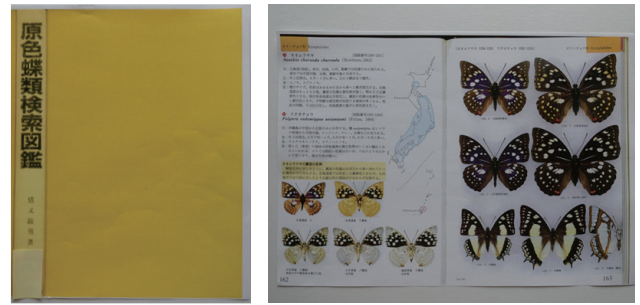


図7.「原色蝶類検索図鑑」猪俣敏男著 平成2(1990)年発行.

尾器を図鑑として初めて図示している。

⑤「原色昆虫大図鑑 第1巻(蝶・蛾)」白水隆 北隆館(東京) < 1985(S60)年11月15日版発行. B5版 原色図鑑. 全366p, 図版63p(蝶部門48p), 種の解説83p. 掲載種213種(日本列島産) >

北隆館が戦後すぐに出版された「日本昆虫図鑑」が昆虫全分野を対象としており5000種近くを1冊に収めていた。図版もモノクロであった。その後の学問的な進歩で、名称の変更、種数の増加、内容の一部改訂、さらに印刷技術の進歩で原色図版への改定を行い出版されたのである。さらに、蝶と蛾だけでも2700種を掲載し、さらに雌雄、季節型、地理的変異をも図示し、約3900頭の個体数を掲載するため、昆虫の部門別に出版された。本図鑑はその第1巻、蝶・蛾篇として出版されたのである。戦後の北隆館の昆虫図鑑は、昆虫学の深化の歴史を示すものと言えよう。

初版の時期は南西諸島がまだ日本への返還前であったため、掲載されたチョウは主に屋久島以北に生息する種が掲載されており、本図鑑では現在の全日本領土のチョウ213種、734個体が掲載されている。チョウ部門の著者は「日本昆虫図鑑」と同じ、戦後の昆虫図鑑の執筆第一人者である九州大学教授の白水隆である。

本図鑑は原色図版、A4版と大型で分厚い図鑑であったため、青少年の昆虫愛好家には手が届きにくい図鑑であった。一方、日本を代表する昆虫図鑑だけに、多くの学校の図書室や公共図書館などには設置され、多くの昆虫愛好家に活用されている。

本図鑑の中で掲載されているチョウは213種である。その中で、日本人が命名記載した種は34種であり、そ

のうち松村松年の記載によるものが 23 種と多い。本図鑑著者の白水隆の記載は 6 種である。

⑥「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男著 北隆館（東京）

< 1990(H2) 年 6 月発行. A 5 版 全 284p, 原色図鑑. 検索図表 48 p, 図・説明 205p, 掲載種 246 種 (迷蝶 4 種含) +12 亜種 (日本列島) >

本図鑑は、チョウの分類学が深化し、種、亜種、地方型、季節型など詳細に図鑑でも掲載されており、研究熱心なアマチュアの愛好家にも応えられるように出版された図鑑である。

この図鑑は、最初に族・科・属・種へと検索を進められるように翅脈図なども豊富に提示した”検索図表”が 48 p にまとめて掲載されている。そのあとに 246 種の種別のチョウの写真とその分布図が入っての説明が記されている。ただ、後にタテハチョウ科にテングチョウ科、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科は統合されるが、この図鑑ではまだ別科になっている。

本図鑑では 246 種が掲示されているが、その中で日本人の命名種は 33 種であり、そのうち松村松年の記載種は 19 種、白水隆の記載種は 7 種である。

⑦「日本産蝶類標準図鑑」白水隆著 学習研究社（東京）

< 2006(H18) 年 8 月発行. A 4 版 全 336p, 原色図鑑. 図鑑の使い方と用語解説 11 p, 図版 127・解説 180p, 掲載種 324 種 (迷蝶 50 種含) + 追補疑問種 28 種 (日本列島) >

本図鑑の執筆者は白水隆となっているが、“発刊に当って”で「故・白水隆九州大学名誉教授が生前に企画されたものを、先生の遺志を引き継ぐべく、各分野の専門家が集まり、先生の言葉に従いこの図鑑を編集した」と記されている。編集代表者は九州大学教授矢田脩である。これまで日本のチョウ類図鑑を記述してきたが、戦後のチョウ類図鑑の骨組みを造ってこられたのは白水隆名誉教授であった。その集大成としての本図鑑であるため、貴重な図鑑であるといえるであろう。

本図鑑の内容は、これまでの図鑑で見られる各チョウの命名記載者と記載年号がかなり修正されている。前図鑑と比較するとモンキアゲハなど 90 種が修正されて

いること、タテハチョウ科にテングチョウ科、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科が含まれる新分類となっていること、迷蝶や北上種などに関しても詳細に記述されていること、ギフチョウなど地方による斑紋などの変異を多数の産地別個体写真を示し解説されていること、類似種の見分け方やその分布地の地図上への明示など、現在出版されているチョウ類図鑑の中では、最も新しい情報により充実化された図鑑であると思う。

本図鑑での日本人命名種は 12 種であり、そのうち松村松年の命名種は 7 種、白水隆の命名種は 2 種であった。

⑧「フィールドガイド 日本のチョウ」日本チョウ類保全協会編 誠文堂新光社（東京）

< 2012(H24) 年 6 月発行. A 5 版 全 326p, 原色図鑑. 図・説明 264p, 検索表 44p. 記載種 271 種 (外来種 4 種含), (日本列島) >

本書は、一般の昆虫愛好家が扱いやすいポケットサイズでありながら、現在の日本のチョウについての同定、生態など必要な情報が十分得られる優れた図鑑になっている。特に類似種ないし雌雄を見分けるポイントが図示されて見易くなっている。さらに、その種の分布地を日本地図に明示してある点も一般の昆虫愛好家には有難い。

本書の科の分類は、近年修正された通り、タテハチョウ科の中にテングチョウ科、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科を統合させている。

筆者も少年たちと昆虫採集に同行することが多いが、昆虫に興味を持っている少年たちに推薦している一冊である。

4. おわりに

日本のチョウに学名がいつ頃付けられたか、そのうち日本人が命名者になっていったのはいつ頃かを見てきた。また、それらの学名で掲載された蝶類の図鑑がどのように変遷してきたかを記してきた。

日本のチョウの学名については、江戸時代の 1875 年にリンネにより初めて学名が付けられ、それ以降 1941 (S16) 年まで外国人による新種発表が続いた。1896 年になり松村松年により日本人で初めての新種記



図 8. 「日本産蝶類標準図鑑」白水隆著 平成 18(2006) 年発行.



図 9. 「フィールドガイド 日本のチョウ」日本チョウ類保全協会編 平成 24(2012) 年発行.



載がなされ、その後近年まで新種の発見が続いたが、その数は12種で日本のチョウの約95%までが外国人による命名であった。逆に見ると、それほど外国から見て、日本のチョウに対する関心が古から強かったと言えるだろう。

日本の蝶類の図鑑については、明治時代に入りブライヤーによる「日本蝶類圖譜」が最初であるが、日本人による本格的な図鑑は松村松年の1929(S4)年「日本通俗昆虫圖説」が最初であり、昆虫学ないし昆虫図鑑の発展の道を開いていったと言えるだろう。戦前の図鑑には当時の占領地域の樺太、朝鮮、台湾などが含まれており、図鑑で登場するチョウも多彩であった。松村松年の流れをくむ平山修次郎の「原色蝶類圖譜」が出される頃から、手塚治虫などのアマチュア昆虫愛好家の登場が、図鑑類の必要性を高めていった。戦後は北隆館が本格的な「日本昆虫圖鑑」のシリーズ図鑑を今日まで順次出されていく、一方で、横山光男の「原色日本蝶類図鑑」などはアマチュアの愛好家に愛読されていった。その後、チョウの分類も亜種、地方型、迷蝶などの詳細な記載がされ充実度が高い白水隆の「日本産蝶類標準図鑑」へと発展して行った。因みに、松村松年が新種記載した22種は、「日本産蝶類標準図鑑」では7種が残り、他は外国人の記載に修正されている。

蝶類の図鑑の充実は、アマチュアの中でも亜種や地方型、迷蝶などを求めてのレベルの高い採集を楽しむ傾向となっていた。一方で、子どもたちや一般の自然愛好家にとって使いやすい軽便な「フィールドノート日本のチョウ」などの図鑑も出され、図鑑に対する多様な期待に応える時代になっている。しかし、最近昆虫採集会をすると、参加の子どもや一般の方が現地でスマホを使い即座にITでチョウなどの同定をする姿が多くなった。しかもその同定はアマチュアの子どもや一般の方にすれば十分な回答が出てくる。一方で、某大手の本屋に行ってみると本格的な昆虫図鑑類は全くなく、店の方に尋ねると、販売が少ない図鑑類は置かないようにしましたとのことであった。時代が変わることを痛感し、子どもや昆虫愛好家が図鑑から離れていく傾向に寂しさを感じた。

参考文献・資料

石井悌・江崎悌三他(1950)「日本昆虫圖鑑」改訂版、昭和25年11月20日発行、北隆館(東京)
井上寛・白水隆他(1970)「原色昆虫大圖鑑 第1巻」昭和60年11月10日15版発行、北隆館(東京)
猪俣敏男(1990)「原色蝶類検索図鑑」平成2年3月20日初版発行、北隆館(東京)
神吉正雄(2023)「昆虫図鑑に登場するオサムシの変遷—前編(1931~1962年)」2023年、箴頭27, 6-25, 日本オサムシ研究会

神吉正雄(2023)「昆虫図鑑に登場するオサムシの変遷—後編(1963~2013年)」2023年、箴頭28, 4-29, 日本オサムシ研究会
川副昭人・若林守男(1976)「原色日本蝶類図鑑」(改訂版)、平成3年1月1日12刷発行
国立国会図書館(2008)「虫を記録する—昆虫図鑑古今東西」第154回常設展北大125年史論文・資料編301-318
斎木健一(2014)「図鑑大好き~ダーウィンからはじまる100の図鑑の話」千葉県立中央博物館平成26年度企画展
白水隆・原章(1968)「原色日本産蝶類幼虫大図鑑Ⅱ」昭和43年3月1日4刷発行、保育社(大阪)
白水隆・黒子浩(1996)「エコロン自然シリーズ 蝶・蛾」平成8年1月31日発行、保育社(大阪)
白水隆(2006)「日本産蝶類標準図鑑」2006年8月22日初版第1刷発行、学習研究社(東京)
諏訪正明(2003)「北海道大学所蔵の学術標本—特に昆虫標本について—」北大125年史論文・資料編301-318
高橋寿郎(1981)「兵庫県の昆虫研究小史」, “六甲山の昆虫たち” 167-187、昭和56年3月1日発行、神戸新聞出版センター(神戸)
武田享(1994)「昆虫関係の貴重な図鑑・書籍—今西文庫及び原文庫を中心として—」岐阜大学附属図書館報, 1994年, No.12, 館蔵資料紹介3-4.
俵浩三(1993)「近代日本における植物図鑑の発達とその背景」造園雑誌57(1)1-15
手塚治虫(1998)「手塚治虫の昆虫博覧会」1998年4月30日発行、いそっぷ社(東京)
日本チョウ類保全協会(2012)「フィールドガイド日本のチョウ」2012年4月30日発行、誠文堂新光社(東京)
平山修次郎(1939)「原色蝶類圖説」昭和14年6月15日発行、三省堂(東京)
平山修次郎(1940)「原色甲蟲圖説」昭和16年12月20日再版発行、三省堂(東京)
藤岡知夫(1981)「図鑑 日本の蝶」昭和56年4月30日2版発行、ニュー・サイエンス社(東京)
松村松年(1929)「日本通俗昆虫圖説 蝶之部」昭和4年10月1日発行、春陽堂(東京)
松村松年(1931)「日本通俗昆虫圖説 甲蟲之部」昭和6年10月4日発行、春陽堂(東京)
渡辺恭平(2023)「昆虫の和名にみる思いの命名問題」日本分類学会連合, 第22回日本分類学会連合公開シンポジウム「標準と名って何?—その歴史と現状、展望まで—」13-14
横山光男(1954)「原色日本蝶類図鑑」昭和29年6月5日発行、保育社(大阪)